



広島オリーブ会

# オリーブひろしま

広島オリーブ会会報

第27号

2021(令和3)年5月31日発行  
広島オリーブ会事務局(佐藤啓之)

〒730-0047  
広島市中区平野町11-38 原野ビル603  
【TEL】082-533-7253 【FAX】082-533-7254  
【E-mail】hiroshima\_olive@yahoo.co.jp

<http://www.hiroshima-olive.info>

## 2021 新体制発足

広島オリーブ会の体制が新しくなりました。後藤会長の下、未来に向けて始動します。引き続きよろしくお祈いします。

会長	新 後藤昇 (20回生)	青年部長	新 廣田茂哲 (43回生)
	上野秀昭 (22回生)	事務局長	新 佐藤啓之 (32回生)
副会長	大森富士子 (27回生)	監査	占部卓 (20回生)
	新 栗田博正 (37回生)		新 北村年弘 (29回生)

新 会長あいさつ



20回生 後藤昇

### 広島オリーブ会進化論

〜時空を超えた交流の会に〜  
先日、広島オリーブ会の目的が議論になりました。単に会員の親睦が目的なのか、社会

新 事務局長あいさつ



32回生 佐藤啓之

32回生の佐藤啓之でございます。この度、新会長の後藤先輩から事務局の運営を打診いただき、お受けしました。前事務局長の藤本先輩は本当に素晴らしい事務局長でしたので、比較すると、

に貢献する団体なのかという観点です。役員の大半は仲良しクラブでよいとの意見でした。会則には、「会員相互の親睦を図り母校の事業を援助し併せて地域文化の発展に寄与する。」とあるので、発足時の目的は親睦だけではないようです。

これまで、芸術を愛する会や野山を歩く会、瀬戸内を巡る会、先端知識の講演会などを開催し、地域文化の発展にも寄与しています。野坂先輩と上野副会長は、山中高女の遺品を母校に継承し平和教育を援助されています。親睦以外の目的も果たしてきているのです。いま、コロナ禍で、個人の行動、企業や行政の運営、家族や友人関係まで大きく様変わりし、広島オリーブ会も懇親の場を失って存続の岐路に立っています。

この会が発足したのは20世紀昭和の時代でした。世が遷り変わるにつれ、交流親睦の方法も変わってよいと思えます。郷土と母校の歴史を敬いITを通して世界中どこからでも参加して楽しめる、時空を超えた21世紀型の会に進化する好機ではないでしょうか。新たな形態への進化を促す触媒の役として、会の発展に努めたいと思えます。

大変みずばらしく見えるのではないかと思います。自分らしくやっていきたいと思っております。10数年前に青年部長をお受けした時も後藤先輩からのお誘いでした。実は、後藤先輩と私の妻は誕生日が同じなんです。有無を言わせないとレッシュャーを感じるのはそのせいかもしれません。ともかく、縁あって広島で就職し、縁あって広島でIT会社を立ち上げ、縁あってオリーブ会

会長退任あいさつ



17回生 佐藤克則

この度、会長を退くことになりました。

10年前に会長をお引き受けしたときには、いささか不安もありましたが、皆さまのご支援のおかげで、何とかその職責を果たすことができました。毎年度、毎年度の行事が思い起こされます。広島オリーブ会では多くの行事を実行しており、やりがいのある会長職でした。

今年も、コロナウイルスの影響により、みんなが集まって行う総会・懇親会を開くことができませんでしたが、これはどこのオリーブ会も同じようです。残念なことです。

毎年の総会・懇親会は楽しいものです。1年に一度、わずかな時間での行事とはいえず、同じ学び舎で学んだ者同士、気心が通じ合うものです。大森副会長の気合の入った司会、毎年少しずつ違う担当学年幹事の段取り、会食時の来賓の方々との語り、どれも

の皆さまとお付き合ひさせていただいておりますので、今後も広島オリーブ会がコロナ禍を乗り越え、いろいろな活動を早く再開できるように考えて参りたいと思っております。一方で、私の就任中に事務局業務のAI化を図り、運営事務の効率化を進めたいと思っております。どうぞ、皆さまよろしくお祈い致します。

思い出に残っております。加えて、これも毎年の行事である山中高女の原爆死没者慰霊祭。被爆地広島で生まれ育ったわけではないものの、この行事も欠かせませんでした。母校からも、校友会の代表者、副校長先生方にお越しいただき、厳粛ななかにも心温まる式典を催すことができました。これからも毎年続けていかなければならない、大切な催しです。

広島オリーブ会は、私の人生の中でも大切な存在です。この先もできる限り、いろいろな行事に参加したいと思っております。そして、先輩方や若い方々と、さらなる交流を深めていくつもりです。今後ともよろしくお付き合ひください。

事務局長退任あいさつ



29回生 藤本真弓

2011年、広島オリーブ会会長が織田瑠治さん(10回生)から佐藤克則さん(17回生)にバトンタッチされ、新体制となりました。それまで事務局を務められた大森富士子さん(27回生)が副会長に就任され、私が事務局を引き継ぐこととなりました。

ご承知の通り、事務局の仕事は多種多彩であり、それまでの大森さんのご尽力には到底及ぶはずありません。また、元来大雑把な性格でミスが多く、皆さまには何度もお迷惑をおかけしました。この場を借りてお詫びするとともに、温かく見守ってくださいましたことに感謝を申し上げます。



今年度開催した総会について

このところ、広島オリーブ会の役員会はオンラインで開催しています。意思決定を目的とするのであれば、オンライン会議で事足りる状況です。しかしながら、懇親会を中心とする幹事会をオンラインで開催することを考えると、「そこまでして開催する」よりは、収束後に楽しく懇親した方がよいかなという意見が多かったわけですね。

今回のオンライン総会でも、総会の議事については、役員が資料を画面に投影して説

明し、会員の皆さまに承認いただける場合は、オンライン会議ツール「Zoom」の画面下の機能一覧の中の「リアクション」 「手を挙げる」 ボタンをクリックしていただき、承認の有無を確認することとされています。また、初めてのオンライン開催ですので、参加者の皆さまの混乱がないよう議事のみとしていきます。今後、コロナ禍がさらに長期化するのであれば、懇親会やその他の行事等についても、オンライン開催を試行してはいかげでしょうか。これまで参加が難しかった会員の皆さまにもご参加いただける、記憶に残る行事を行い、来年の総会にも反映させて参りたいと考えています。

(32回生 佐藤啓之)

就任中は佐藤会長の意向を踏まえて新会員の開拓、特に若い会員の参加に力を注ぎました。少しずつ若い人が幹事会に顔を出してくるようになり、ありがたく思います。総会もある程度のプログラムをルーティンとして担当幹事が取り組みやすいよう工夫しました。総会は山中高女の同窓会である橘香会との合同開催ですが、ここ数年は橘香会からのご参加がなく寂しく思っています。

また、運営をスムーズに進めるために佐藤会長の提案で役員会を定期的に開催しました。活動の主軸を話し合い、それを幹事会で懇親しながら確認していく、というやり方で、活動がより活性化されたように思います。幹事会では会場をほぼ固定したことで、目新しさはない一方で「いつもの会」という意識ができたのではないのでしょうか。多くの企画の中で、2015年に行った「山中高女原爆

雑多に書き連ねましたが、この10年間楽しく事務局を担当させていただきました。今回、会長の交代を踏まえ、事務局を交代することになりました。後任の佐藤啓之さん(32回生)はITにも強く優秀な方なので、安心です。新会長の後藤昇さん(20回生)とともに、広島オリーブ会をしっかりと発展させてくださることを期待しています。これからは一会員として広島オリーブ会に協力して参ります。ありがとうございました。

# 山中高女生徒の残した記録を母校へ、被爆の歴史を伝える

22回生 上野秀昭

2020年、地元紙の中国新聞が「被爆75年ヒロシマの空白」という連載をスタート。その第1回目には梶山ハルという女性を取り上げた。原爆供養塔の遺骨を遺族へ返還しようという広島市の取り組みの中で、中国新聞の山本祐司記者が、納骨名簿と国立追悼平和祈念館の情報とを照合し、納骨名簿の「鍛冶山はる」が祈念館の「梶山ハル」と同一人物であることを突き止めた。

さらに、ハルさんの孫で山中高女の2年生だった梶山初枝さんも被爆死したこと、初枝さんの遺品などは初枝さんの弟が大切に保管しておられることも判明。山本記者は母校の前身、山中高等女学校の同窓会「橘香会」が当会に承継されていると聞き、当会事務局に連絡。以前より山中高女と縁が深かった野坂顧問(元会長)が中心となってお話を伺った。

## 原爆死没者慰霊祭 山中高女の慰霊祭が営まれました

29回生 藤本真弓



2020年8月6日午前8時、うす曇りのなか、広島市中区国泰寺町の荒神堂で

つものように慰霊祭が始まりました。広島の人間としてこの日は特別な日である。犠牲者を悼み、核兵器廃絶の願いを信じ、恒久平和を祈る日だ。しかし、今年はずいぶん新型コロナウイルスの影響でこの慰霊祭さえも縮小の要請があった。町内会とも話し合った結果、椅子を離す・町内会の受付を設置しない・ろうそく線香は置かない・短時間で済ませ速やかに解散などの配慮を行うこととした。

ものとして、後世のために公開・展示してもらいたいとの意向で、「広島オリーブ会はそのような平和活動を行う組織なのか」と問われた。そこで、母校は平和教育に力を入れており、毎年生徒が福山から被爆慰霊祭に参列している旨を説明。併せて母校の図書館で保管し、平和教育に活用させてもらえないかと母校に相談した。答えは、当校(福山)で預かるのが適当であるとのことだった。

修治さんとは昨年8月6日の雑魚場町での慰霊祭以来、何回かお会いした。お話しによれば、写真や手紙の現物を確認しようと箱から出すたびに劣化が進むことに驚かれ、経年劣化の防止策に悩んでおられた。その後、原爆資料館にも交渉され、遺品など一部については受け入れてもらえることになった。そして最終的には、母校が希望されるならば遺品は複製(画像データやコピー)、名簿・書籍類は原本を提供したいと希望された。これを受け、当会内部でも

我が附属福山高校からは例年通り学友会会長の追悼の辞、副会長の献鶴をいただき、広報部長とあわせて3名の生徒が参列してくれた。さらに、清水欽也校長、平賀博之副校長、学友会指導主任の田中伸也先生にもお越しいただいた。広島オリーブ会では毎年皆さんにご案内のメールをお送りしていたが、今年はお断りしていただき、お問い合わせをいただいた方には開催の旨をお伝えした。それでもおよそ50名の方々にご参加いただき、しめやかに行くことができた。附属の生徒たちは原爆について、戦争について深く学

# 新型コロナウイルス感染症から、身を守るために必要なこと

広島大学大学院医系科学研究科 ウイルス学教授 坂口剛正 先生



名古屋大学医学部基礎医学卒業。1987年、広島大学で、ウイルス学・免疫学・細胞生物学の教育・研究に従事。日本ウイルス学会、日本免疫学会、日本微生物学会、日本ウイルス学会、日本ウイルス学会のエキスパート。

新型コロナウイルス感染症(COVID-19)は、ウイルスを包んだ飛沫(唾液などのしぶき)を浴びる「飛沫感染」が主です。感染者が爆発的に増えた理由として、潜伏期間のウイルス放出量が多いことが挙げられます。季節性インフルエンザでは潜伏期間中にもウイルスを少し放出しますが、放出のピークは発症後です。しかしCOVID-19では潜伏期間にもかなりのウイルスを排出している、発症する頃にウイルス放出量のピークを迎えます。潜伏期間中は症状が出ないため、大量のウイルスを放出しながら普段通りの生活をした結果、感染者が増えたと考えられます。「自分は感染していません。自分は感染していません。自分は感染していません。」

### ウイルスの放出量

【季節性インフルエンザ】  
1日〜3日  
潜伏期間 発症  
ウイルス放出量

潜伏期間にもウイルスを放出するが、放出のピークは発症後なので感染を広げにくい

【新型コロナウイルス】  
1日〜12日  
潜伏期間 発症  
ウイルス放出量

発症前に多量のウイルスを放出し、不特定多数に感染させる確率が高い

「自分も感染しているかもしれない」という気持ちで予防していきたいものです。予防の基本は、マスク・手洗い・3密回避です。「飛沫感染」を防ぐには、マスクを外して長時間お互いに会話をするのを避けます。3密とは、密集・密閉・密接のことですが、最後の「密接」には声を出すことも意味として含まれています。カラオケは感染が起りやすい場面の一つです。

手にウイルスをつけて口元にもって来て感染する「接触感染」を防ぐには手洗いをします。COVID-19に限らず、手洗いは感染症対策の基本でもあります。水洗いである程度洗い流すことはできますが、ウイルスは石けんなどに含まれる界面活性剤に触れると、粒子が損傷して死んでしまします。そのため、より効果を高めるために石けんを手を洗いましう。

感染が起る場所を調べると、家庭内・職場・飲食店・医療福祉施設の4箇所が浮かび上がってきます。このうち職場・飲食店では、マスクを外して会話をしている場面が感染するリスクが考えられます。職場で普段はマスクをしていても昼食などでは

マスクを外しますし、飲食店では近い距離ですと話をすることで感染します。こうして感染して、家庭・医療福祉施設にウイルスを持ち込むケースが多いのです。実際に感染が起りやすい場面が分かっていたので、そこに特に気をつけなければいけません。

関西圏、首都圏を中心に第4波が懸念されていますが、感染再拡大の要因の一つが「変異株」(英国株、南アフリカ株、ブラジル株)です。特徴は、感染力が従来のウイルスより強くて感染を広げやすいということです。イギリスの発表では、「英国株」は1.7倍の感染力を持つとのこと。大阪府や兵庫県の新規感染者の大半は、変異株に感染しているようです。広島ではまだ新規感染者の20〜30%ほどですが(すべて英国株です)、今後増えていくことが懸念されます。変異株に対しても、私たちができることは従来と同じです。マスク、手洗い、3密を避ける、さらに体調を整えて免疫力を上げておくということ。そうやって頑張りながら、ワクチン接種を待ちましょう。ワクチン接種が進めば、現在のイスラエルのように感染も終息に近づいていくものと期待します。

(27回生 坂口剛正)